

噴射切削装置応用時に発現した 偶発事項についての考察

○久保田一見, Lina M. Cardenas,
山邊陽出代, 吉田至純, 末藤千香子,
後藤讓治
長大・歯・小児歯

噴射切削装置は切削時の不快事項の少ない装置として、脚光を浴びている。今回我々は、噴射切削装置KCP-1000により偶発露髄を惹起した場合、出血開始時間にどのような影響を及ぼすか、また、本装置応用時の歯の周囲粘膜への影響等について検討を行なった。さらに、KCP-1000応用時に見られた気腫の発現についても症例を提示し、考察する。
【方法】

1. 偶発露髄時の出血開始時間への影響

実験群：噴射切削装置KCP-1000を用いて、幼犬の歯に偶発露髄を惹起させ、露髄面からの出血開始時間を計測した。

対照群：ダイヤモンドバーを用いて偶発露髄を惹起させ、露髄面からの出血開始時間を計測し比較した。

2. 口腔粘膜への影響

実験群：噴射切削装置KCP-1000を歯に應用したのち、上下顎犬歯付近の口腔粘膜に、約20mmの切開を入れた。止血完了までガーゼで被い、1分毎に創面の観察を行い、止血時間を計測した。

対照群：口腔粘膜に、実験群と同様に切開を入れ、止血時間を計測した。

【結果および考察】

1. 偶発露髄時の出血開始時間への影響

KCP-1000応用時に偶発露髄を来した場合、露髄から出血開始までに時間を要することが判明した。KCP-1000による窩洞形成時の偶発露髄に、術者が気付かずに見過ごす可能性があり、窩洞形成時の偶発露髄に注意が必要である。

2. 口腔粘膜への影響

実験群において止血時間の延長が認められた。KCP-1000による窩洞形成時に、周囲の歯肉粘膜へ、何らかの刺激が加えられる可能性が示唆された。

3. 気腫の発現について

幼犬に、噴射切削装置KCP-1000を用いて、窩洞形成を行なったところ、舌下部粘膜等に気腫を生じた症例を数例経験した。この際ラバーダム防湿は行なっていなかった。

2および3により、本装置応用時のラバーダム防湿の重要性が示唆された。

生活歯髄切断時に起きた偶発的穿孔の 対応として選択したhemisectionとその後

○道添圭司, 森主宜延, 小椋正
鹿大・歯・小児歯

治療時の偶発事故が不幸にも生じた場合、いかなる適切な対応を患者側に立って行うかは倫理上重要なことである。本症例は、Eの生活歯髄切断(VA)時に生じた髄床底の偶発的穿孔に際して、我々が経験した問題点とその解決への過程、さらにその後についての報告である。

症例：患者は年齢4歳6か月の女兒。DE摂食時疼痛を主訴として当科外来を受診。臨床診査・検査からDEを生活歯髄切断の適応と判断し治療を開始。しかしEのVA時、経験不十分な術者が出血状態に不安を感じ外来教育における中堅の歯科医に確認を依頼。そこで、担当医への説明もなく歯科医が交代し、髄床底の穿孔と判断し救急処置として、カルピタール®を填塞し、セメントで裏装、閉鎖を行った。保護者に[根の状態が不良]と説明した。その後、最初の担当医が指導医と相談、カルピタール®では予後不良が予想され、社会的責任を重んじ、本来の垂直的状态を出来るだけ変えず、Fの萌出に貢献する遠心根を残すEのhemisectionとDとのブリッジを計画した。保護者にE近心根の保存が困難であることとhemisectionおよびブリッジにする理由を説明し了解を得、ブリッジを装着した。その後不快症状の訴えもなく、X線所見においても良好な経過を辿っている。

問題点と対応：1.遭遇時の術者に対しての非難と患者ならびに保護者への説明。2.関与した中堅歯科医師3名の患者への責任感情の持ち方。4.責任ある治療方針。1.に対して、医療現場における望まれる態度ではなく、患者への好ましい対応に集中すべきである。また保護者へ真摯な説明がなされたかは今後の課題である。2.関与した中堅歯科医師の患者への責任感情の欠如に疑問があり、各人の責任観のもと最初の担当医に任せず、4者で検討をすべきであった。3.治療方針の判断については、適切であったように思える。

結論：今回の事故に対して、患者への真摯な説明は課題として残った。教育機関における中堅指導医の行動には疑問が残った。また問題を第3者として調整するcoordinatorが重要であることが示された。